

# あげ・まげ・じげじまん × 戦後70年

## 第8回 私の経験した戦争、若者へ話す思い

今年、1945年8月15日の終戦から70年という節目の年を迎えます。しかし、当時の戦争経験者が高齢となり、年々、戦争体験を次世代へ語り継ぐ語り手が少なくなっています。さらに、戦後70年がたち、戦争を知らない若い世代も増加。戦争の記憶が風化しつつあります。

今回は、日野高校で課題研究(営業テクニックと広報の仕組み)を選択している、3年生の遠藤さゆきさん、西村風香さん、大石晶さんの3人が、中田将さん(金持)に戦争の記憶や当時のまちの様子、そして若い世代へ託したい思いなどを聞きました。



▲当時を思い出しながら語る中田さん

軍に入るきっかけは将校になりたかったから

中田さんのお歳と軍隊に入るきっかけを教えてください。私は、大正14年生まれで、もうすぐ90歳になります。子どものころは根雨小学校から日野農林学校(旧制中等学校)今の高等学校にあたる)へ通っていました。卒業後は、黒坂小学校で代用教員(講師)をしながら、軍の将校になるための勉強をしていました。2年間勉強し、陸軍士官学校を受験。一次試験には合格したものの、二次試験に合格できず軍に入隊することになり

なりました。それが、私が19歳のとき、昭和19年9月20日のことでした。

軍に入ると、将校になるための試験を受け、平壤(北朝鮮)にある陸軍予備士官学校に在籍していました。その後、陸軍士官学校へ転校する命令を受けたのですが、終戦を迎えたため、それはかないませんでした。結局、戦争で実戦を経験することはありませんでした。

なぜ将校になりたかったのですか。

将校になるということはとても名誉なことだったからです。教員になったのもその勉強をするためでした。

ます。まちなかには店などが立ち並び、徐々に活気が取り戻しつつありました。

若者の様子はどうか。

戦後、時代が民主主義へと変わり、私も青年団に入ったのですが、私がよく話すものから青年団長をさせられ、根雨公会堂で青年議会を開いたり、遠藤基一さんと「わがまち新聞」を作ったりしていました。

特に、若者の間には旧態依然とした体制やものを打破したいという気概がありましたね。

### まちや地域の未来を守ってほしい

戦後70年を振り返って今の時代をどう思いますか。また、今の若者に伝えたいことはありますか。

一番心配しているのは、後継者がいなくなることで。そこを若い人たちがどう考えているのか気になります。その両親を含め、みんなが家を守っていくという意識がなくなっていくのではないかと感じています。後継者がいなくなれば空

し、軍人になるためだけに時間を費やしていました。おそらく多くの人もそのような理由で軍人になったかっただのどと思います。そして、軍人になったからには、国を守るために命をかけて戦おうという気持ちに変わっていったのです。

### 終戦、そしてシベリア抑留へ

終戦はどのようにして迎えたのですか。

終戦は平壤の陸軍予備士官学校で迎えました。終戦の放送(玉音放送)を聞いたときはびっくりしました。その頃は私も周りも「国のためには命は惜しくない」という気持ちでしたし、まさか戦争に負けるとは思いませんでした。

シベリア抑留を経験されたということですが、終戦からシベリア抑留までのいきさつを教えてください。

当時、ソ連(ロシア)と日本は不可侵条約(日ソ中立条約)を結んでいました。しかし、終戦間際にソ連が同条約を破棄し参戦。満州(中国東北部および内モンゴル自治区北東部)に侵

き家も増え、まちも活気がなくなっています。今も町の人口は減り続けていますし、日野高校の生徒数も減っています。地域の人には「守ろう」という熱意を持ってほしいです。

また、若い人たちには「やろうと思ったら何でもできる」という気持ちでいろいろなことに取り組んでほしいです。そして、学生のうちにしっかりと勉強して、恋愛し結婚して子どもを作り、自分の生まれ育ったまちや地域の未来を守ってほしいと願っています。



▲中田さんの話に熱心に耳を傾ける

攻、そのまま終戦を迎え、私は捕虜となりシベリアの収容所まで連れて行かれたのです。ちょうどアメリカ軍とソ連軍の分割占領ライン(現在の北朝鮮と韓国の国境)である北緯38度線から以北の日本人が連行されたこととなります。その数はおよそ57万5千人、そこで強制労働に従事させられました。

### 「思いの届かぬ地」シベリア

シベリアでの生活について教えてください。まず、連れて行かれたときの気持ちを教えてください。

どうしようもなく、面白くなかったですね。負けたいという軍律があり、勝手

に逃げ出すこともできませんでした。ソ連の言うことに従うしかないという気持ちでした。

徐々に活を取り戻しつつあったまち

いろいろな仕事を経験しました。碎石の仕事、鉄塔の基礎作り、大工仕事のほか、漬け物工場や製材工場

は、始めに大きな穴を掘るので、仲間たちと「自分たちの墓を掘ってるんじゃないか」と話したのを覚えています。夏は炎天下で草刈り、冬は厳しい寒さに耐え凍傷に気を付けながら仕事をしました。

そのときの気持ちは

本当に日本に帰ることができるといって、帰るためだけに生き延びるためには、とにかく健康でいたいと思っています。しかし、そういった思いが届かない地がシベリアでした。飢餓や凍死などで10分の1にあたるおよそ5万5千人が亡くなったといわれています。こうした悲惨な体験、戦争が二度と繰り返されないことを願っています。

日本へはいつごろ帰ってきましたか。

早い人で2年ほどで帰国できたそうです。しかし、輸送船がなく、なかなか帰国が進みませんでした。私が帰国できたのは、抑留から4年がたった昭和24年10月のことでした。



▶左から、西村風香さん、遠藤さゆきさん、中田さん、大石晶さん

「じげじまん」の語り手を募集しています

昔の行事や地域のしきたり、田植え歌やわらべ唄などを語っていただく若い世代に話を語り継いでいきませんか。

ける人があれば伺います。伺った内容は、町広報紙に掲載するほか、録音や録画して保存します。詳しくは町図書館(電話72-1300)まで。